

教育センター通信

ほど 火床の火の心を紡ぐ

第3号（通算第9号）
平成26年7月2日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター 発行



「学びのマルシェ」開講式
☆6月14日（土）15日（日）
☆嵐南小学校多目的ホール
①開会前の会場の様子
②開会の挨拶（長沼教育委員長）
③児童代表「決意の言葉」
④市長激励の言葉（國定市長）
⑤激励の言葉に耳を傾ける児童

「さんじょう学びのマルシェ」開講に当たり

教育センター統括指導主事 平野政幸

一歩踏み込んだ「乗り入れ授業」、全教職員で取り組む「ボトムアップ」組織への改変。小中一貫教育全面実施2年目を迎え、各中学校区では、「輝く子ども達の笑顔」のため、地域の特性を生かしながら新たな取組に挑戦されていることに敬意を表します。

さて、「さんじょう学びのマルシェ」では開講に当たり市民ボランティアの方々を始め、会場を提供していただいた皆様、開講に携わった関係の皆様にご心より御礼申し上げます。

「さんじょう学びのマルシェ」は6月14・15日に開講式を行い、翌週から会場を第一中・嵐南小学校、一ノ木戸小学校、教育センター（栄庁舎）、下田公民館の4つに分け、年間36回実施する予定です。教室は4つあり、内2つは中学1・2年生を対象に国語・数学・英語を学習するトップランナー教室、エキスパート教室があります。この教室は塾への委託で日曜日の午後に実施されます。他2つは小学5年生から中学2年生を対象に小学生は算数、中学生は数学と英語を学習するステップアップ教室、プラスワン教室があります。この教室は市民ボランティアの方々を指導者として土曜日の午前に実施されます。

この「さんじょう学びのマルシェ」は、子どもたちの「もっと勉強が分かりたい!」「少しでも勉強が分かるようになりたい!」を応援する学習会です。中でも、ステップアップ教室、プラスワン教室は、多くの市民ボランティアの方々の三条の子どもたちを思う気持ちで運営されています。多くの方々に支えられながら始まった「さんじょう学びのマルシェ」、三条の子どもたちの「やる気」に応えるため、今後ともよろしく願いいたします。

第1回ハイパーQU活用研修会 ～6月12日～

“ハイパーQUを活用した学級づくり”について、県立教育センター鈴木正彦指導主事様からご講演をいただきました。鈴木先生は、QU検査を考案した河村茂雄先生の研修室に所属し、県内外での講演会の講師として忙しい日々を送られている方です。教職員31名が参加し、熱心に耳を傾けていました。

「QU検査は手段であって目的ではない!」「アセスメントの手段である!」「QUは結果が出てからがスタートである!」と力説されました。QU検査により、今の学級の状態を知ることが大切!プロット表を見て、「A子がこの場所にいることは理解できる!」

「えっ、どうしてB男がここにいるの?」等、個人をしっかりと見取っていくことが重要!子どものサインを見逃さず、「あなたのことを分かっているよ」と子どもに伝えていくことがQ-U検査を生かすことになる。その際、大切なことは「どう伝えたかではなく、どう伝わったか!」なのです……。鈴木先生の熱意がひしひしと伝わってくる講演会でした。以下、参加者の意見・感想です。



- ハイパーQUの活用の仕方が分かった。夏休みの研修に活用したい。
- QUの小手先の見方ではなく、一人一人を大切に作るルールとリレーション、スルーしない、聴き手を意識するなど、根本的なことを再確認できてよかった。隣の若い先生に伝えたい。
- 今後の学年・学級経営にとって基本的ですが大切なことを改めて考え、今までの担任としての指導を振り返ることができました。学校内でのチームとしての連携を考えると疑問が残ります。
- 現在の学級経営で生かせるヒントをたくさんいただくことができ、エネルギーをもらった気がします。スモールステップで子どもたちを認め温かい言葉がけを増やしていきたいと思います。
- 満足群に多く入ることがよいのではなく、個々の答えが大切であると改めて分かりました。満足群に入る人数ばかり気を取られていたので、今後一人一人にしっかり向き合いたいと思う。
- 職員同士の満足度が大切だということ、非常に納得できました。

第1回教科カリキュラムの活用、授業づくり講座・演習!

標記研修会を6月16日(月)17日(火)19日(木)に開催しました。ねらいは次の二つです。

- ・「指導の構想」における「重点指導内容」や「前期・中期・後期の指導の概要」を理解する。
 - ・演習を通じて、「教科カリキュラム」における指導内容の明確化と系統化、教科書における学習の系統性を理解する。 ※17日(火) 社会、理科、技術家庭 19日(木) 生活、音楽、美術、保健体育
- 最初に作業シートを使っての個人作業。中学校区の教科カリキュラムから1単元を選び、当該学級の児童生徒の実態から「既習内容の確認」「発展的な内容」「系統的な学習内容の積み上げ」等を見直しました。その後、教科ごとのグループ演習。各グループ内で作業シートを紹介し合い、意見交換を行いました。最後に担当指導主事からの指導助言、第2回講座・演習に向けての説明等がありました。国語4名、算数・数学7名、英語2名と少人数でしたが、活発な意見交換が行われ、小中一貫教育の教科カリキュラムについての理解が深まりました。【第2回】8月18日(月)～20日(水)



特別支援教育の理念を活かした授業改善

小中一貫教育推進課 統括指導主事 唐沢 実

【授業場面①】

T「この前の時間は『野菜なぞなぞ』を作りましたね」

T「今度は何をしたいですか？」

C「なぞなぞを出したい」「みんなでやり合おう」

T「今日は、作ったなぞなぞをみんなで出し合しましょう」

【授業場面②】

T「みんなが作ったのを読んでいて、先生も作りたくなりました」と、先生が作ったなぞなぞを示し、それを教材にして、活動の進め方を説明します。

【授業場面③】

C「キャベツだ」「とうもろこし！」「ねぎじゃない」先生がなぞなぞを出している間に、子どもたちは自由に考えをつぶやきます。先生は、つぶやきを笑顔で受けながら、活動の進め方を説明しています。

【授業場面④】

T「今度はみんなの番です」

T「二人組でやります。どちらからやろうか？」

C「じゃんけんで決める！」

【授業場面⑤】

隣の席同士の二人組の後は、席を離れて、自由に二人組をつくっての活動が展開します。

【授業場面⑥】

二人組ペアをつくっていく中で、二人の子が残ってしまいました。すかさず、

T「『やろう』と言えるといいよ」

C「やろう」「いいよ」

【ステキ①】

「前の時間は『野菜なぞなぞ』を作ったので、今日はなぞなぞを出し合います」と、進めがちです。ところが、今日やることを決めているにもかかわらず、あえて子どもにやりたいことを聞くワンクッションをはさみます。子どもは自分で学習内容を決めた気になってしまいます。勉強は先生から教えられたり与えられたりするものではないという意識を育てることにつながっていきます。

【ステキ②】

子どもは、「先生も私たちと一緒に勉強を楽しんでいる」という気持ちになります。それを教材にしてやり方を説明する流れも、ごく自然に進んでいきます。

【ステキ③】

やり方を理解する場でありながら、子どもたちは、活動の見通しを持ちながら、やりたくてやりたくてたまらなくなってきています。

【ステキ④】

あくまで子どもに判断を委ねます。「じゃんけんをして先にやる人を決めましょう」と指示を出してしまいがちの場面です。日ごろから、子どもに学習の方向を決める場、方法を子どもと一緒に考えていこうとされていることが伺えます。

【ステキ⑤】

一緒にやる相手を決める自由度があります。机から離れる開放感があります。1年生でも机上の座学で45分進む授業をよく見ます。動と静のメリハリ、やって分かる幼い子の学び方を活かした展開です。

【ステキ⑥】

先生は、保育所の人間関係の固定化が課題と考えています。きっとあの二人は、出身保育所が違うのでしょう。先生の言葉を待っていたかのように、声を掛け合いペアをつくっていきました。学習中での人間関係づくりへの配慮です。

ある学校で拝見した授業を紹介しました。この学校では、配慮が必要なお子さんがどの学年にも複数在籍し、日々の学級経営に苦慮していました。

そのような学校課題を受け、校内研修に「授業のユニバーサルデザイン化」を取り上げ、全職員で取り組んでいます。

特別支援教育の理念を活かした授業改善とは、子どもの意識を大切に、今ある子どもの現状からスタートする授業です。配慮が必要なお子さんへの手立ては、ほかの多くの子にとっても分かりやすく活躍できる手立てになります。

特別支援教育は、一人一人の子どもを大切にする教育にほかなりません。授業改善の視点として取り入れていかれることを期待しています。

各学区における小中一貫教育の紹介 ～その2～

大島中学校区



大島中学区の3校が、5月27日午後1時半から「第4回ゴミ拾いウォーク」を行いました。ゴミ拾いウォークは小中一貫教育の活動の一つで、小・中学生縦割りの人間関係や奉仕の精神を培うことを目的に始めた活動です。活動場所を須頃小学校区と大島小校区に分け、中学生が母校に出向いて小学生と一緒に活動します。須頃小会場には手伝いの地域の方を含め110人が参加しました。開会式で竹内須頃小校長が「小学生と中学生が力を合わせて、いい汗を流し、学校の周りをきれいにしましょう。」とあいさつしました。

その後、縦割りの12班に分かれ、輪になって最初に自己紹介、中学生からのやり方説明を行い、「がんばるぞ！オー！」と気合を入れ、トンゴやゴミ袋を持って出発しました。

総合グラウンドに向かった班は「ゴミあまり落ちてないね。」とやや拍子抜けしたような感じでした。それでも側溝に落ちていたゴミを見つけ、中学生の指示に従い、拾ったゴミを燃えるものと燃えないものに分けて袋に入れていました。

活動は1時間ほどで終了。暑い日となりましたが、小・中学生が力を合わせ、よい汗を流しました。

【平成26年度の主な予定（7月以降）】

- ・第1回教育懇談会 7/8（火）※第2回は2月に開催
- ・いじめ見逃しゼロスクール集会 7/15（火）
- ・職員研修「妙高アドベンチャー」（会場：国立妙高青少年自然の家） 8/5（火）
- ・第2回中学校区研修会（NRT分析、学習規律、教科等） 8/6（水）
- ・職員研修「人権・同和教育」（会場：新発田市） 8/22（金）
- ・「心と学びの教育フォーラム」講演会 11月中に
- ・小中一貫教育推進協議会 第2回：11/11（火）
- 第3回：2/24（火）
- ・第2回小小交流活動 11月中に実施

教育の窓 ～随時掲載します～

昭和50年代の教育事情です。今は必須なパソコンはもちろん、コピー機もありませんでした。職員会議提案資料、学級だより等は、鉄筆&ガリ板でした。（うなずく方は定年間近の方…！？）斜体と方眼体があり、私は方眼体を使っていました。年間指導計画の作成も鉄筆&ガリ板。鉄筆に力が入り過ぎてしまい、完成間近で穴が開いてしまい、初めからやり直したことも数知れず。その後、輪転機、ボールペン原紙、コピー機とどんどん便利になっていきました。

今も運動会と展覧会は学校の二大行事ですが、昭和50年代の展覧会は物凄かった。展示作品は絵と工作、家庭科作品、習字。そして学芸会！「偶数学年が劇、奇数学年が音楽発表」と決まっていたように思います。劇に当たった年は大変でした。作品制作と同時並行での劇の練習・衣装作り新採用にはきつかった。見かねた保護者が手伝ってくれました。なんとか当日を向かえると今度は劇の出来栄が気になり、終わるまで気が気ではありませんでした。ベテランの先輩は前日に飾り付けが終わった段階で作品の成績付けをしていましたが、私にはそんな余裕はありませんでした。現在はそこまで忙しい展覧会はずりありません。最初に物凄い展覧会を経験したためでしょうか、その後に異動した学校で展覧会を苦にしたことはありません。今は懐かしい思い出です。（M）

【連絡とお願い】

☆各中学校区で「乗り入れ授業」の公開が行われております。教育センター指導主事に連絡があった公開授業はメールで各校に配信しています。他校の「乗り入れ授業」の様子を直接見聞できる機会ですので、時間に都合のつく教職員はご参観ください。

☆7.13 水害から今年で10年。水害の教訓を次代に語り継ぐためにも防災教育プログラムに基づく授業を進めるとともに、水防学習館を活用し子どもたちが水害について学ぶ機会を設けてください。